
魔王候補とその教育係

幸町

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王候補とその教育係

【Nコード】

N0573U

【作者名】

幸町

【あらすじ】

「幸せな魔界にしたいです」幼いころ、父である魔王にそう言ったりリイは、なぜか魔王候補の一人に選ばれてしまった。周囲からはイメージが悪い、ひきこもりがちで厳しい教育係のベルに認められないリイ。ある日をきっかけによやくベルから実技課題をだされ、魔王試験に挑むリイは、何を思うか。

少女リリイとその男ベル

みんなを笑顔にするくらい、幸せな魔界にしたいです—— リリイ

*

花畑にいる白いゆるやかなドレスを着ていた少女は、花の冠を作っていた。

周りには蝶が舞い、動物たちに囲まれて、微笑ましい光景である。やがて動物たちは、何かを察して慌ただしくどこかへと逃げるように走り去った。

一人の男が少女に近づいた。

少女は、彼の思考を読み取ることはできずに、にこやかに微笑む。

「ベル？ あなたのために冠を作っていたところなの」

少女は、ベルと呼んだその男の頭に、花の冠をかぶせる。

あまり外に出たがらない男は—— 周囲には醜い老人だと思われるが——、実際は美女と謳われてもおかしくはない、綺麗な容姿をしている。

これで黒いスーツじゃなくて青いドレスだったらキレイでカッコイイお姫様だったのに、と少女は残念に思うが、それは思うだけで彼に言わない。

彼の小言が、余計に増えるだけである。

しかし少女が何を考えているかは、もはや明白だったとばかりにベルは溜め息をついた。

「……勉強の時間ですよ、リリイ様」

「あ、そうだった。行かなくちゃ、ベルが太陽で干からびちゃう！」

「干からびるか、このアホ娘！」

きゃー！

ベルの荒げた声を相図に、リリイは笑って逃げ走る。

ベルは溜め息をついた後、ゆっくりとリリイの後を追った。

はじめてのであい

リリイは天界にいてもおかしくなくらいに純粹で無垢である、魔王も溺愛する末の娘だ。

実際に一時期、魔界にいるのはもったいないと天界からスカウトがくるほどで、その噂を聞いた人間界の国々の王族からの求婚が、リリイが幼くともかまわず絶えないほどだった。

リリイの耳に入ることなく、魔王がこれを必死に阻止したのは言うまでもない。

閑話休題。

リリイの夢は、魔界を幸せにすることである。

今日の魔界が、欲に忠実とはいえ人間界並み——アタマがお花畑な人たちばかりである天界はそもそも争いはない——に平和なのは、現魔王とその王妃のおかげだ。

いや大半は王妃の影響によるだろう。

禍々しくどす黒い邪気が当たり前で血の海と化していた弱肉強食な世界が、彼女によって一変、人が変わり街がなりたち、魔界に植物が生えた。

現魔王が王妃に会わなければ今までと同じ世界だったのではないかと噂されるほど、王妃の影響力は大きい。

悪魔や魔族の頂点である一族のリリイが、本来ならば純粹無垢であるはずがないのだが、これもまた母親である王妃の影響かもしれない。

リリイの“魔界を幸せにすること”という一見のほんとした夢は、血に飢え色情に耽り食を貪る魔界の住人たちからすれば……表向きちつぽけでバカにされやすい願いだ。

しかし心底望むものでもある。

魔界には、王妃やその子供たちのような“あたたかいもの”はない。

“あたたかいもの”が何なのかわからない魔界の住人たちは、ただひたすら何か埋めるように、今も欲にはしる。

リリイ自身、“あたたかいもの”が何かはわからないが、『笑顔は幸せなアカシ』という王妃の言葉で思った。

優しい笑顔が絶えない魔界にしてみたい、と。

もともとリリイは、魔王になるつもりは毛頭なかった。

魔王にふさわしくないと自覚しているし魔王でなくとも幸せにできるとリリイは思っていたのだが、何故か候補の一人に選ばれてしまった。

魔王を目指さなくとも、自分より力がある魔族や兄様や姉様たちのほうがふさわしいのになあ？と思うリリイだが、選ばれたからに

は頑張ろうと心の中で誓った。

教育係は魔王候補一人に優秀な魔族一人つく。

魔王候補および教育係任命披露宴という長々たらしい名前のついたパーティーで、誰が誰につくのかそこで発表される。

候補の兄や姉が次々と呼ばれ、教育係とともに行動する。

リリイの番がきたが、リリイは一人だった。

「？」

そのときベルは開発中の発明に夢中で気づくことはなかった。

行方不明の教育係に慌ただしくなり混乱を招いた異例のパーティーとなった。

後日、魔王立会いの下——大衆の前は勘弁してほしいとベルが拒否をしたため、立ち会いは魔王と王妃、宰相だけだった——
——初めてベルとリリイは出会う。

「ベル、この娘に最たる知恵を与えよ。リリイ、このひきこもりをたまには外に連れ出してやれよ」

ベルは魔王に反論しようとしたが、リリイの元気がいい返事によって遮られた。

ベルはリリイを睨む。

「よろしくね、ベル」

リリイは笑顔でベルに握手を求める。

（今の握手はいいが、手え出すんじゃないぞ）

（てめえと一緒にすんな、このエロ魔王が！）

睨みを利かせた大の男2人が、テレパシーでこのような会話をしているとは、リリイは思いもしない。

これがいつもどおり

月日は流れる。

末の娘だったリリイは、あれから3人の弟や妹ができた。

本来であれば子供ができにくい魔族のはずである。

しかし教育を終えた魔王候補に仕事を与えた魔王は、仕事がその分少なくなりあまり忙しくなくなれば、一番愛する王妃のもとへと向かう。

最も忙しくとも王妃のもとへと向かうのだが、やることはひとつである。

100年に一人できるかできないかぐらいの割合で魔族の子は生まれるのだが……100年以内に3人の子を成し遂げたというのは、現魔王ののちの伝説となった。

それはさておき。

魔王とは、代々にわたる試験によって決まる。

そのため教育期間というものはない。

教育係は、試験がどのような内容かはもちろん知らされていないが、魔王となるためには役に立つ知識を、また自分がもてる知識を魔王候補に全て与えた。

教育係が修了したと宣言すれば、魔王の仕事を押しつけられ……手伝うことになる。

ほとんどの者は修了したと宣言されているのだが、リリイはただ一人、まだされていなかった。

今日こそ認めてみせる！

リリイは拳を握りしめて心に誓った。

今、リリイはベルの部屋にいる。

中は狭く、薄暗い。

紙や金属類が乱雑に散らばり、よくわからない液体の数々が熱せられていた。

科学者と鉄を扱う職人2人かけあわせた部屋である。

要は雑然として汚いところである。

ベルが生活している奥の部屋ははたしてどうなのか、想像するだけでも怖いとリリイは思った。

用意された小さな椅子にリリイは座ると、こう言った。

「ベル、何で修了宣言してくれないの？ もう、教育は終わったでしょう？」

「それは私の問題を全て完璧に正解できたら言いなさい、試験は私

の問題以上でしょう、容易いものではないことは確かです。今日はこれを解いてください」

「む……、何ですかこれは！」

リリイは数枚の紙（以下をテストと表記する）を渡された。

1時間で解答なさいと書いていたために、リリイは慌てつつ、テストとベルを交互に見る。

「オレを見る暇があるなら、さっさとやったらどうだ？」

あと54分ですよというベルの言葉に、反論しようとしたリリイは言葉につまる。

毎回のことで、汚い机を何とかリリイはキレイに確保した。

急いでテストの問題を解き始める。

そして結果は――。

「時間終了です……おや、どうしました？」

「しらじらしい！ もうちょっと、あともうちょっと時間ちょうだい……」

「……何のために時間制限しているかわかっているのか？」

「ごめんなさい……」

時間制限のせいで書けなかった問題以外、リリイはすべて正解である。

「惜しいですね、では、また明日」

ここ数年こんなことしか、リリイはやっていないような気がするのだった。

いい加減認めてよ

教育係の一人であるブブは、情報がいかに使えるか活用法と実践を試みると長兄のルーに言ったそうだ。

それはルーにとって遊びだったかもしれないが、実際は修了宣言を左右するものだったのである。

ルーは城に住む侍女の噂を聞いて事実を確認した後、腐敗した悪魔の大臣に——、どの方法を使ったのかは様々な憶測が飛び交うが——、証拠をつきつけて退位させたというエピソードがあることから、そこでブブに修了を告げられた。

三男のジンもそうだった。

その教育係のレイラーが、ジンに用意した悪魔たち数百人を倒すように言ったという。

無論、悪魔たちの一人ひとりは、実力があつたことをここに明記しておく。

平和になった魔界とはいえ、本気を出せば人間界の一国を滅ぼす猛者たちである。

しかしジンは、それらに臆することなく物の見事にその悪魔たちを倒し、教育を修了させたのだった。

そのほか例をあげればきりが無いが、この二人が有力候補とされ

ている。

リリイはすでに魔王になることをあきらめているが——　とい
うより努力はしていたが最初からあきらめていたが——、せめ
てベルに認められたかった。

兄様や姉様は実技のようなものを行っているけれど、どうして私
はテストなの？

疑問に思えば、すぐさま尋ねるリリイである。

ベルに答えた。

「確かに現実問題と机上の空論では、全く違う」

「じゃあ」

「しかし机上の問題すらできないリリイ様が、実技など、できます
か？」

できるとは、リリイには言えなかった。

ブブのように情報をうまく使うことも、ジンのように力を使うこ
とも、リリイにはできないと思う。

リリイは、まるで自信がなかった。

無言のリリイに、ベルは何かを言おうとしたが、それを遮られた。

「別にいいんじゃないか？」

声の主は、魔王だった。

リリイはもちろんのこと、ベルも驚いた。

ベルの風変わりな部屋は、リリイ以外誰もよらないほど人が来る
ことがない。

最も人が来てもベルは門前払いなのだが。

それにベルは滅多に人の前に現れることもなく、偏屈で醜い老人
だと思われる。

尚更、人が来るなどあるはずがなく、下手をすればリリイより驚
いていたかもしれない。

部屋を見渡し、きつたねえなーと言う魔王を、見ているベルは固
まっていた。

「ああ、言つとくけど身贋しているつもりはないからな？ それ
から試験には時間なんて魔界なんだ、そもそも概念がねえんだし、
リリイのテストを見せてもらったが、書いていないところ以外は完
璧だったんだ。もう充分、実技課題を与えてもいいと思うんだが
な」

「うそ！」

魔王の言葉に反応したのは、リリイが先だった。

リリイの声に、魔王が首をかしげる。

「何が？」

「試験って、時間関係ないって本当！？」

「ああ、現に兄ちゃんや姉ちゃんに聞いただろ？ 実技課題に時間制限あるって言ってたか？」

「……ない、かも？」

「てなわけだ、ベル。過保護もほどにしるよ」

「……あなたに、言われたくないですよ」

結局、来た目的が何だったのかわからないままに魔王は去って行った。

魔王が出てから、リリイはベルに開口一番こう言った。

「ベルのうそつき！」

「まさか魔王様が試験にいうとは……思いもよらなんだ」

「うーそーつきー！！」

「……嘘はついていない。そもそも試験の内容は代々の魔王候補にしか知らされていないし、その魔王候補たちも内容を口外するなど言われているんだ。仮にも一教育係、全ては憶測にすぎない」

「む……、でもこれでようやく……！」

「それは俺に並ぶ知識を持って言うことですね、リリイ様」

期待を抱き明るい口調で話すリリイに、ベルは気分のどん底に突き落とすばかりに、リリイに数枚の紙を渡した。

それはもはや2人のお決まりになっている、テスト。

「何で!？」

「あと30分だぞ、アホ娘」

「そして何で今日は短いの!」

うるさい早くやれというベルの言葉に従い、泣く泣く必死で問題を解こうとするリリイ。

しかし、そんな短時間で問題を解けるはずもなく結果は散々だった。

いつもよりひどい仕上がりである。

「残念でしたね、リリイ様」

何故か不機嫌になっているベルを、どうしてだか理解できないリリイだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0573u/>

魔王候補とその教育係

2011年6月26日15時57分発行